

2015.10

電波新聞社 平山秀雄会長「わが回想録」

『究極に挑む・日本ビクター』

中村 誠

電波新聞一面に、1991年（平成3年）7月から10月まで64回にわたり掲載された『究極に挑む・日本ビクター』を、特別な許可を得て再録させていただきました。

電波新聞社の創業者である平山秀雄会長がコツコツ書き留めておいたものに、経済評論家の泉和幸氏が3ヶ月にわたり追加取材してまとめられたものです。追加取材には、（取材順に）高野、青池、垣木、坊上、丹羽、穴道、原田、佐々木、北村、金子各氏に対応頂きました。

外部・マスコミから見た日本ビクターが歩んだ歴史、改めて是非ご覧ください。

平山会長は、この「わが回想録」の掲載にあたり、次のように書かれています。

『かつて「鉄は国家なり」と言われた時代から、「エレクトロニクスは国家なり」に変わった時代に、日本ビクターは大きな飛躍をとげました。

戦争での壊滅的な打撃から、極めて技術志向の強い企業として立ち直り発展を続けています。同社が開発したVHS方式が世界の強い支持を受けたビデオ方式として定着したことはその良い例でしょう。

外国技術に依存しがちな環境下で育った同社が、どうして独自の技術を海外にまで広める企業に生まれ変わったのか？その足跡を知ることは、大変参考になるとともに、興味深い読み物になると思います。』

全64回の連載の中で、その答えがどう書かれているのでしょうか？

答えの大事な一つは、高柳健次郎先生が日本ビクターに入社されたことは間違いありません。きっとあなたも一役かっているに違いありません。

電波新聞社は1950年（昭和25年）設立、創業者である平山秀雄氏（故人）は、広くエレクトロニクス全般を連日報道し、大いに勉強させてもらいました。

私事になりますが、機器営業から社内募集で広報室（当初は宣伝部）に移ってから在籍した約四半世紀、個人で電波新聞と日経をとり鎌倉から東京までの通勤の電車の中ですみずみまで読みました。私にとっては、電波新聞は「情報の宝庫」でした。それがマスコミとの対応等で大いに役立ったことは言うまでもありません。